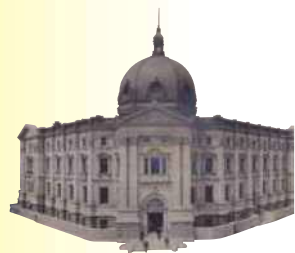


# 世界に開かれた港 貿易の拠点として整備され発展する横浜



神奈川宿に臨む  
のどかな漁村に  
つくられた港街

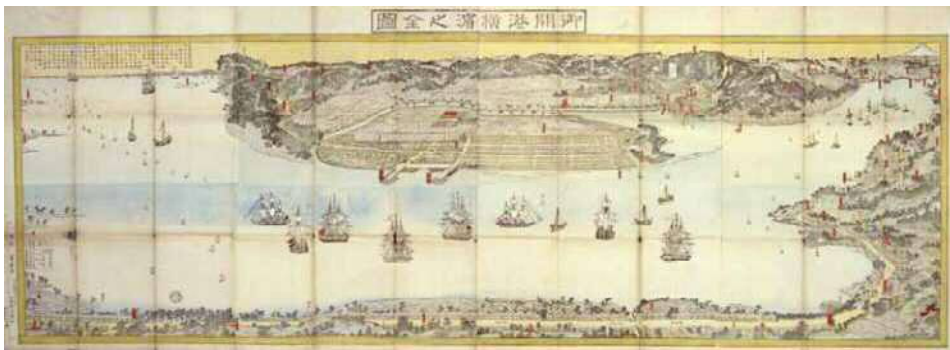
開港から数年後には  
街並みが整った横浜

のどかな漁村だった横浜は開港に伴い大きく姿を変えていく。

いまの元町側から海に向かって北西方向に長く延びた砂嘴が横浜村だ。江戸時代前期に開墾された吉田新田との間は深い入江になっていて、開港に先立ち、三河国出身の太田屋左兵衛によって埋め立てられた。

幕府は、横浜村の端に当たる横浜新田を拡充し、吉田新田との境を流れる派大岡川（現在の首都高速横浜羽線）の位置に関を設け、海側を外国人居留地と定めた。

これが「関内」の由来であり、現在、石川町を流れる堀川も居留地（横浜新田）と山手の間に堀があったこ



貞秀作「御開港横浜之全図」では対岸の子安村辺りから米国や英国などの船が浮かぶ海越しに港を描いている（横浜開港資料館蔵）



慶応元（1865）年、開港前後の横浜の街の区画を知ることができるクリベ作「横浜絵図面」。外国人の手による実測図（横浜開港資料館蔵）



開港により急速に発展した横浜の中心部を通る本町通りには、生糸検査所や町会所、横浜郵便電信局などの建物が通りを飾った（神奈川県立歴史博物館蔵）



明治18（1885）年に埴頭前に建てられた横浜税関監視庁舎。中央に六角の塔を有する左右対称の建物で、関東大震災で焼失（長崎大学付属図書館蔵）



明治5（1872）年、横浜駅（現在の桜木町駅）と新橋駅（旧・汐留駅）を結び鉄道が開通。海を埋め立てての突貫工事だった。埋立地が入江を横切る様子が写された古写真（神奈川県立歴史博物館蔵）



幕末から明治にかけて活躍した3代目歌川広重作「横浜鉄道館蒸気車往返之図」。鉄道開通当時の横浜駅が描かれ、明治の躍動感や華やいた雰囲気伝わる（横浜開港資料館蔵）



開港間もない横浜のメインストリート、本町通りを描いた五雲亭貞秀作「神名川横浜新開港図」（国立国会図書館蔵）。三井呉服店の紋も見える。両替商として横浜の金融を一手に握ったという。



従来の居留地（山下）が手狭になり新たにつくられた山手の居留地。欧米人を主体とした街になったが、明治32（1899）年に居留地は廃止になる（神奈川県立歴史博物館蔵）



居留地のグランドホテルは明治6（1873）年に創業した。関東大震災で焼失し、その後ホテルニューグランドができるが、資本的なつながりはない（神奈川県立歴史博物館蔵）

との名残である。

NHKの番組「プラタモリ」では、関内駅の地下にも入り、派大岡川の護岸を紹介していたが、いずれ駅の修復工事などで人目に触れることもなく消えてしまうことであろう。

急ピッチで街が広がられ、安政6（1859）年に横浜は開港、貿易が始まる。

幕府は、江戸日本橋の三井呉服店をはじめとする商人を全国から集め、翌万延元（1860）年にはその数が200軒ほどになったという。

外国人も居留地に次々と店を開き、ホテルやビール工場なども建てられ、開港から数年後にはほぼ街並みが完成する。

やがて外国人たちも増え、居留地は手狭になった。西の山手にも居留地がつくられ、主に西洋人たちが移り住むが、最初の居留地がダウタウンで、山手がアップタウンといえるだろう。ダウタウンには中華街が形成されていく。

明治5（1872）年、新橋と横浜を結ぶ日本最初の鉄道が開通し、横浜はさらに発展していくこととなる。



財政に余裕がない明治政府は鉄道建設の埋め立て事業を横浜の材木商・高島嘉右衛門に任せる。横浜の近代化に尽力した高島は、高島町にもその名を留める（横浜開港資料館蔵）

## SPECIALTY

### 名物



### 横浜クラシック家具

明治4（1871）年に、英国人のゴールマンが元町に欧風家具製造会社を設立した。開港した横浜には様々な文化が移入し、それに対応した職業や産業が興った。伝統と職人技を活かした、洗練されたデザインが特徴の家具は今日に受け継がれ、横浜クラシック家具として「かながわの名産100選」にも選ばれている。

# 絹と茶を輸出し 綿や砂糖を 輸入した日本



明治の養蚕の様子を写した古写真。横浜港からの輸出品で、生糸の占める割合は7割以上にもなった（横浜開港資料館蔵）



生糸の品質チェックを行っていたのが、明治29（1896）年に発足した横浜生糸検査所。当初は中区本町にあったが、関東大震災で被災し、大正15（1926）年に北仲通で再建された（横浜開港資料館蔵）



横浜正金銀行本店本館の写真。外為が未確立な当時、正金（現金）で貿易決済を行なうため設立された特殊銀行で、かつてあった東京銀行の前身（神奈川県歴史博物館蔵）

## SPECIALTY

名物



### 横浜スカーフ

横浜開港で生糸輸出が盛んになったことから生まれた伝統工芸品。シルク100%のスカーフにあしらわれた高度な手染技術、丁寧な縫製が特徴。明治6（1873）年のウィーン万国博覧会や明治13（1880）年のメルボルン万国博覧会への出展をきっかけに盛んになり、世界から高い評価を受けた。「かながわの名産100選」。



### 横浜芝山漆器

横浜で制作されている伝統工芸品の一つ。貝殻や牛骨、珊瑚、象牙などを様々な模様加工して、漆の中にはめ込んだもので、細工が立体的に浮かび上がることが特徴。横浜が開港し、外国人貿易商から高い評価を得て多くの職人が移り住み、輸出向けの生産が盛んに行われた。「かながわの名産100選」にも選定。



「英一番館」跡地に建つシルクセンター敷地内に生える桑の木は、県下の養蚕地であった津久井郡から開港当時に移植されたもの。

## 海外で高く評価された日本の生糸とお茶

横浜には、海外から綿や砂糖などが輸入され、輸出するための品物が集まった。開港以来、横浜の主要な輸出品は生糸であった。

英国貿易商ウィリアム・ケズウィックは日本の生糸の品質の高さに目をつけ、他に先駆けて居留地にジャーディン・マセソン商会の横浜支店を開設した。地元住民たちは「英一番館」と呼び、現在、跡地のシルクセンターに記念碑が立っている。

当初、商人たちは何が売れるかわからなかったと聞く。生糸取引は開港の年にオランダ商人が購入したが最初というが、その後ジャーディン・マセソン商会のバーバーが芝屋と契約を結び、甲州屋忠右衛門や中居屋重兵衛が続くと伝わる。

当時は、一発当てようと全国から商人が集まったという。山師のような者も多く、横浜の生糸取引も不明瞭な面があったようだ。

生糸取引は投機性が高く、多くの

金持ちが生まれたが、破産する者も生じた。その後、生糸検査所が設立され、次第に正常な生糸取引が行われるようになる。商人たちの質も規模も向上し、成功し巨万の富を得る者が出現する。そのような一人が、本牧の三溪園をつくった原富太郎（三溪）であった。

また、原料の生糸だけでなく、友禅などに用いられる手捺染という技法で美しい模様が施されたスカーフも、丁寧な縫製と海外で高く評価され、輸出された。

お茶も江戸時代からすでに海外で人気を集めていた商品だが、最盛期には国内需要を上回る量の茶が海を渡ったという。当初、茶の取り扱いが許されたのは、横浜、神戸、長崎の3港で、その主な輸出先は米国と英国であった。

日本各地から横浜に集まった茶葉は、山下町の居留地で外国人が経営する「お茶場」と呼ばれる再製工場に運び込まれ、朝早くから近隣の女性たちが汗だくになりながら日雇いの製茶作業に従事したという。

原三溪が明治39（1906）年に開園した三溪園。17.5万㎡の庭園内に京都や鎌倉などから貴重な建造物（10棟が国重要文化財）が移築された。



原三溪は岐阜出身。横浜の養蚕、商家の養子になり抜着の才覚で財をなす。三溪園に多くの日本建築を移築したほか芸術家たちのパトロンにもなった（写真提供：三溪園関係会）



「茶の選別をする女性たち 明治期」の写真に残る、居留地に設けられた「お茶場」で製茶作業に従事する女性たちの姿（横浜開港資料館蔵）



原三溪が一時経営した富岡製糸場。明治5（1872）年に本格的な機械製糸工場として操業。日本の生糸輸出を支えた（放送大学附属図書館蔵）



19世紀後半の輸出茶用のラベル。様々なラベルが伝わるけれどもエキゾチックな日本を意識した意匠（横浜開港資料館蔵）

## SPOT



立ち寄り所

### 横浜マリンタワー

横浜開港100周年記念で、昭和36（1961）年につくられた高さ106mの塔。当初は灯台も兼ねていた。展望フロアからは大バノラマが。特に夜景は必見。レストランやバーも併設【住所】横浜市中区山下町15【電話】045-664-1100【開館】10:00～22:30、不定休【料金】一般750円（展望フロア）<http://marinetower.jp/>

## その他おすすめスポット & 情報

### アンテナショップかながわ屋

県産の食品や酒など約1500品を揃える。鎌倉彫などの工芸品を展示販売するコーナーも【住所】横浜市中区山下町1シルクセンター1F【電話】045-662-4113【営業】10:00～18:00、月曜休み（祝日の場合は営業、翌日休み）http://kanagawaya.com/



### 山手西洋館

明治から昭和初期に建てられた七つの洋館を横浜市が復元し、一般に無料公開している。各洋館では随時イベントが開催され、また、喫茶室が設けられたりグッズを販売したりするところもある。写真は大正15(1926)年に建てられた山手111番館。



### 横浜赤レンガ倉庫

明治後半に東洋初の接岸式埠頭として新港埠頭の建設が行われ、保税倉庫として赤レンガ倉庫もつくられた。現在、飲食店やショップなどが入り、周辺は赤レンガパークとして整備。レトロな港の風情が味わえる一角となっている。



### 日本郵船歴史博物館

近代日本海運の歴史を紹介する博物館。山下公園には、アルデコ洋式のインテリアが見られる買客船氷川丸も【住所】横浜市中区海岸通3-9【電話】045-211-1923【開館】10:00～17:00、月曜休館【入館料】一般400円 http://www.nykc.com/rekishit/



### 横浜港大さん橋国際客船ターミナル

明治27(1894)年に完成して以来、日本の海の玄関として活躍。現在のターミナルは平成14(2002)年にリニューアルされたもので、個性的な意匠と斬新な構造が特徴。隣接する象の鼻パークにはアートのベースやカフェを備えたレストハウスが。

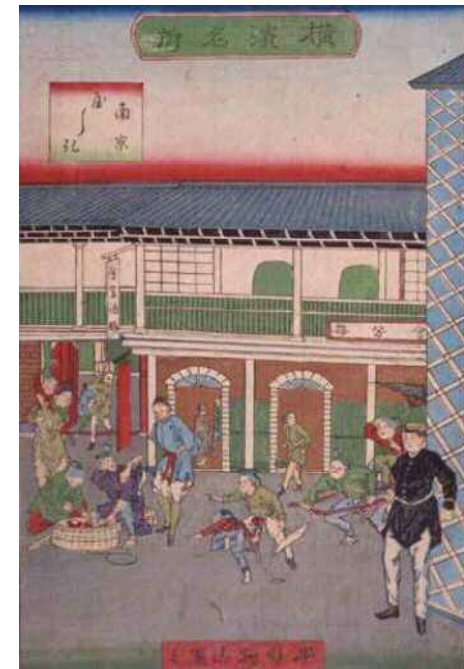


### 横浜みなとみらい21

コンベンション機能を備えた国際交流拠点としてつくられた区画。帆船日本丸が保留する日本丸メモリアルパークには横浜港の歩みが学べる横浜みなと博物館があり、最先端技術に触れられる三菱みなとみらい技術館など人気スポットが点在する。



昭和初期に描かれた神奈川の観光地を紹介する「神奈川県観光図説(二部)」では中華街は特記されていない。中華街がこのような繁華街になるのは戦後のこと(神奈川県立歴史博物館蔵)



外国人居留地の一角に華僑が集いつくられた南京町。華僑は開港後の日本をサポートする役割を担った(神奈川県立歴史博物館蔵)

## 日本で最大 世界でも 有数の中華街

SPOT



立ち寄り所

### 横浜中華街

600を超える店が軒を連ね、半数が中華料理など飲食店というグルメタウン。いくつかの店では横浜中華街コンシェルジュが活動し、街の歴史や文化、中国の食文化情報を発信。胸元の金色の丸いバッジが目印。名物の中華まんじゅうやシューマイ、中華菓子、チャーシュー、中華麺は「かながわの名産100選」。



### 世界に開かれた港 おすすめコース

～徒歩

みなとみらい・馬車道駅～県立歴史博物館(リニューアルのため2018年4月まで休館)～旧横浜生糸検査所(現・横浜第二合同庁舎)～中居屋重兵衛店跡～神奈川運上所跡～横浜開港資料館～横浜港大さん橋～英一番館・ジャーディン・マセソン商会跡(桑の木)～アンテナショップかながわ屋～山下公園(氷川丸)～中華街～みなとみらい・元町・中華街駅

### 日本人と西洋人の間で 橋渡しの役割を担う

エキゾチックな雰囲気と中華料理や中華菓子で人気を集める、横浜屈指の観光名所が中華街である。その規模は、日本はもちろん、世界でもトップクラスを誇る。

横浜開港に伴い横浜村に外国人居留地がつくられ、その一角である横浜新田に華僑が住み着いた。英語が話せ、漢字も使える華僑は、日本人と西洋人の橋渡しの役割を担った。その後、湿気を嫌った西洋人たちが去った後も華僑は留まり、いつしか一大コミュニティを形成する。中華街の原型で、現在のように中華料理店などが軒を連ねるようになるのは戦後のこと。街区が周囲に対して斜めになっているのも新田が造成されたときの名残であり、風水を意識してつくられたというのは俗説である。

居留地誕生からほどなく建てられたのが『三國志』の英雄、関羽を祀る関帝廟だ。商売繁盛に利益があるとされ、故国を離れて活躍する華僑の心のよりどころとなっている。



中華街と元町の間を流れる堀川は外国人居留地と分けるためにつくられた人工の川。当時は橋が三つ架かり居留地と結ばれた。慶応3(1867)年以降、元町背後の高台に山手居留地がつくられていく。



中華街大通りを写した明治末から大正初期の絵はがき。横浜中華街は神戸の南京町や長崎新地の中華街とともに「三大中華街」と謳われる。日本で最大かつ世界でも有数の規模を誇る(横浜開港資料館蔵)

明治5(1872)年に新橋と横浜を結ぶ日本初の鉄道が開業して以来、神奈川県と鉄道は深い関係にある。

安政6(1859)年に横浜が開港し、生糸が重要な輸出品となると、横浜には長野や群馬などで生産された生糸が集まった。当初は陸路で運ばれたが、鉄路による輸送も求められ、明治41(1908)年、横浜と八王子を結ぶ私鉄の横浜鉄道が開業した。

この横浜鉄道は大正時代に国有化され、現在のJR横浜線へと発展する。八王子は生糸の一大集積地であり、まさに生糸の産地を結ぶシルク・レールであった。

県南部を東西に抜ける東海道本線は、明治20(1887)年に横浜駅と国府津駅間が開業。2年後の明治22(1889)年に新橋駅と神戸間が開通した。同年、東海道本線の大船駅と横須賀を結ぶ横須賀線も開業している。

た京浜工業地帯の中を通る現・JR鶴見線もつくっている。戦前戦後と各工場で生産された物資を運び、日本の産業発展に貢献した。横浜駅と大船駅を結ぶJR根岸線も、根岸の工業地帯に物資を運ぶ目的で敷かれた路線であった。…一方、スイッチバックで有名な箱根登山鉄道や、大山ケーブルカー、日本…営業区間が長い箱根ロープウェイなど、県下には観光客を運ぶ目的で発達した私鉄や公共交通も多い。

湘南を代表する江ノ電こと江ノ島電鉄は、明治時代の半ばに増加した海水浴客を見てんで発足した鉄道である。当初は藤沢と江の島を結ぶ路線で、後に鎌倉まで延伸した。本来は茅ヶ崎まで計画していたが断念。藤沢市と鎌倉市の沿岸部の住人の重要な足であると同時に、…部、路面を走る区間があるなど観光路線としても人気である。

横須賀線は軍港・横須賀に軍需物資を運ぶ使命を持っていた。久里浜駅への延伸は昭和19(1944)年だったが、戦争も終盤となり、あらゆる物資が不足する中に開通したということからも軍事的にも重要であったことがうかがえる。

横須賀をはじめ、県下には座間や相模原、綾瀬など、旧日本軍の基地が点在した。軍需物資を生産していたのが川崎や横浜の工業地帯で、その間を抜けたのが、川崎駅と立川駅を結び昭和4(1919)年に全線開業した現・JR南武線である。

当初は私鉄の南武鉄道で、浅野セメント創業者の浅野總一郎もかかわっていた。浅野は青梅鉄道(現・JR青梅線)も経営していて、奥多摩で採掘された原料の石灰石を南武鉄道によって効率よく運ぶことができた。

浅野はまた、自身がつくっ

昭和46(1971)年に全線開通した、大船駅と湘南江の島駅を結ぶ湘南モノレールは懸垂式ならではのダイナミックな走りが醍醐味。二つのトンネルといくつも急勾配を持つ、最大40メートル近い高低差を、最高時速75キロで走り抜ける。

忘れてはならないのが新幹線のモデル路線である。昭和39(1964)年の東海道新幹線開業に先立ち、昭和37(1962)年から綾瀬町(現・綾瀬市)と小田原市鴨宮を結ぶ約30キロの区間で試験運転が始まった。開通後はそのまま路線として使われている。

横浜市内には地下鉄が通り、海側を新交通システムの横浜シーサイドラインが走る。そして近い将来リニアも抜ける。明治の汽笛…声以来、神奈川は様々な鉄道や交通システムを有する先進県であったといえる。

7  
横浜や横須賀、川崎などを結び  
敷かれた鉄道網

# 鉄道と交通

てつどうとこうつう



明治22(1889)年に開業した横須賀線は大正14(1925)年に電化し、昭和5(1930)年、東京駅と横須賀駅間で電車運転を開始。昭和19(1944)年に久里浜へ延伸したのは軍事上重要路線だったから。



箱根登山鉄道の早川橋梁(出山の鉄橋)は川床から43mという高さ。架設に苦勞したが大正8(1919)年に箱根湯本と強羅間で運転を開始。廉価な乗車賃もあり、箱根の観光地化を促進した。



全長約4kmの箱根ロープウェイは昭和34(1959)年に一部で開業し、翌年に全線開通した。通年営業しているロープウェイでは日本一長い。もっとも有料乗車数が多いとしてギネスにも認定。



江ノ電は明治35(1902)年に藤沢と片瀬(現・江の島)間で開業。日本で6番目の電気鉄道だったが、当初は人力車組合などの反対運動もあったという。路面電車のように道路を走る区間も。



湘南モノレールは昭和45(1970)年3月、大阪万博の開幕1週間前に、大船駅と西鎌倉駅間を結び操業した。翌年、湘南江の島駅まで延伸し全線開業。周辺住民の足として稼働する。